

時代をえぐる表現者の刃

手嶋 龍一（外交ジャーナリスト、作家）

イラン映画『別離』の主な舞台は、この国の首都テヘランの北側に広がる住宅地帯だ。主人公の銀行員ナデルは、妻と娘、そして年老いた父親と暮らしている。或る日、ナデルが娘と自宅のアパートに帰ってくると、アルツハイマー症を患う父親が手首をベッドに縛りつけられ、床に伏して意識不明になっていた。そんな父親の姿に狼狽し立ちすくむナデル。介護を任せていたラジエーの姿が見当たらない。ほどなくして帰ってきたラジエーを見とがめ、怒りに駆られて彼女をドアから外に突き出してしまふ。物語はここからバザールの迷路のように展開していく。

バザールの雑踏を歩きかう人々が属する様々な社会階層。そこで売られている品物の良し悪し。商人と交わす値引き交渉の作法。イランの人々なら、物語の舞台設定から瞬時に全てを読みとれるのだろう。清潔な住宅街に住むミドルクラスの銀行員は、二時間もかけて郊外からバスで通ってくる介護役の女性とは階級が異なっている。革命後のイラン社会でもなお、社会階層の差は厳然としているのである。その事実が『別離』の重要な伏線になっている。

銀行員ナデルの妻で英語教師のシミンは、娘の将来を考えて苦勞の末に出国許可を取り付け、祖国イランを出ようとしている。だが夫のナデルは、父親の介護を言いたてて国を離れることを拒み続ける。夫婦の絆は離婚の危機を孕んで家庭裁判所に持ち込まれる。恵まれた階層に属する彼らは、決意すれば国を出ることができる。だが介護の仕事で失業中の夫を支えるラジエーは、かつかつの暮らしをアッラーへの信仰でかろうじて支えているのである。

二時間を超えるこの長編は、一カット、一カットに複雑な状況設定を潜ませて静かに推移していく。それゆえ画面にじっと見入っていただければ、観客はたちまちこの物語から置き去りにされてしまう。ハリウッド映画のように、観客を瞬時も退屈させまいとクライマックスが次々と用意されているわけではないからだ。

イランにも、ごくありきたりな暮らしがある——映画『別離』を見た人々は、そこに日本と少しも変わらぬ常の暮らしを見つけて感銘を覚えるだろう。だが、平凡な日常を営む人々が暮らすイランは、核開発にひた走り、超大国アメリカとの対決姿勢を露わにしている。そして「イランの核」の脅威にさらされる宿敵イスラエルは、原子力施設を標的にイラン攻撃を躊躇わないとしている。これほどの危機のさなかに、テヘランで繰り上げられる日常の営みを見ることの不思議さを思わずにはいられない。

考えてみれば、戦時下の日本にも、それなりの日常はあったのだ

から、いまのテヘランに淡々とした人々の生活があってもすこしもおかしくはない。だが一方で日々の暮らしを映像に限り、一つの物語として巧みに表現できる国は多くない。自己をみつめ、物語に紡いで、観客に伝えるわざをもつ国は、高い文化の力を蓄えている。まさしくイランはそうした国のひとつなのである。小津安二郎監督が敗戦から間もない当時の日本の暮らしを独自のカメラ・アングルで描きだしたように、アスガー・ファルハディ監督は現代のイランの素顔を揺るぎない映像で写しとっている。

かつてジョージ・W・ブッシュ大統領が「悪の枢軸」と呼んだイランは、映画『別離』のなかでまったく異なる表情を見せている。だがそんなイランはまた、西側先進国と異なる内在論理によって動くイスラム国家でもある。イランという国家の奥深くに蠢く人々の衝動をファルハディ監督は鮮烈に描きだしている。

銀行員のナデルが突き飛ばした家政婦ラジエーは妊娠していた。胎児が二ヵ月を超えるとイスラムの法では赤子への殺人罪と見なされる。彼女はこの法を後ろ盾に雇い主のナデルを斬える。その一方でコーランに手をあてると、自らの行動が神の教えに沿ったものだと思ふことができず苦しむ。映画を観終わったあとも、一つのシーンを思い起こして自分なりの謎解きを試みなければならない不思議な作品なのである。

「当局の検閲は野心の表現者を育てる」という。表現の自由が担保されていない社会では、表現者は当局の裏をかいくぐって、自らの主張を巧みに作品に盛り込まなければならない。検閲当局と表現者が真剣勝負を繰り広げているうちに、表現者の刃は存分に鍛えられ、より鋭いものになっていく。スターリンによる鉄の統制下でソ連から記事を送り続けたニューヨーク・タイムズ紙の特派員ハリソン・ソールズベリーのモスクワ発特電。太平洋戦争下に東京にいたフランスの通信社ロベール・ギラン特派員のアジア発特電。これらの記事には時代の闇をえぐって余りある鋭利な刃が埋め込まれていた。

アスガー・ファルハディ監督もまたソールズベリーやギランの系譜を受け継ぐ、驚嘆すべき自己抑制能力を備えた表現者だ。アルツハイマーを患っているナデルの父親は裁判で争われる事実の生き証人にほかならない。家政婦ラジエーではなく、ナデルの父親こそが「ミタ」なのである。だが最後までナデルの父親には沈黙させたまま。この父親こそ自由な表現を許さない検閲官への最後の誓いだたのではないだろうか。

